始後貧血は改善したものの，同年10月HbA1c 9.5％まで上昇したためLH-RH誘導体が中止され，術前血糖コントロール目的に入院し，インスリンにて血糖コントロールされた．本症例ではLH-RH誘導体によって偽閉経状態が作られたことで，脂質異常症が悪化しており，インスリン抵抗性が増大した可能性がある．また，HbA1cが，慢性の不正出血と鉄剤による貧血治療によってみかけ上低値を示し，実際の血糖値を過小評価していたが，不正出血が治療されたことで赤血球寿命が延長し，HbA1cは実際の血糖値を反映するようになったと考えられた．

13　Diazoxideが有効であった，高齢者インスリノーマの2例

松林　泰弘・原　　正雄・佐々木英夫
厚生連新潟医療センター糖尿病・内分泌内科，糖尿病センター

インスリノーマは，インスリン過剰産生から低血糖を来たし，意識消失などの症状を呈する．インスリノーマの多くは良性腫瘍であり，治療の基本は手術療法となるが，手術不能例では薬物療法検討の適応となる．今回，高齢であり，重度の認知症，慢性心不全等の合併症を有し，患者・家族ともに手術療法を希望されなかったケースで，Diazoxideを投与し，血糖コントロールが可能になった症例を経験した．若干の文献的考察も含め，報告する．

症例は，85歳，男性と87歳，女性．2例ともに主訴は低血糖に起因する意識消失であった．入院後も低血糖発作を繰り返し，ブドウ糖投与により意識消失は改善した．血液検査では，著明な高インスリン性低血糖を認め，Fajan index，Taminato指数もインスリノーマに矛盾しない所見であった．腹部造影CT，血管造影検査，選択的カルシウム動注負荷試験で，膵頭部のインスリノーマと診断した．高齢であり手術を希望しないことから，インスリン分泌を抑制し，低血糖発作を予防する為Diazoxide投与による薬物療法を開始．その後，軽度の心拡大増悪，両下肢のpitting edemaを認め，Diazoxideの副作用と考えられたが，利尿剤の投与により速やかな改善が認められた．他に重篤な副作用は出現せず，血糖値も安定した．手術不能なインスリノーマの症例に対し，Diazoxide投与は血糖維持に有用であると考えられた．

14　透析導入後に発見されたCushing病の一剖検例

細島　康宏・山﨑　　肇・吉田　一浩
皆川　真一・木村　慶太・鴨井　久司
長岡赤十字病院内科

症例は61歳，女性．平成19年9月25日，腎不全のため血液透析に導入され，他院で維持透析中であった．平成20年9月頃から下肢の筋力低下が出現し，コルチゾール53.8μg/dl，ACTH 364pg/mlと高値を認めたため入院予定であった．しかし，右視床出血および肺炎を発症し，10月15日に緊急入院した．難治性胃潰瘍を併発しており，出血のため12月30日に死亡した．経過中にガストリンの高値を認めたため腹部CT，カルシウム負荷試験を行ったが，ガストリノーマは否定的であった．また，CRH負荷試験を行ったが，ACTHおよびコルチゾールともに持続高値で変動に乏しく，頭部MRIでも微小腺腫とは判断できず，Cushing病とは診断できなかった．中心静脈栄養を開始後に著明なインスリン抵抗性から高血糖を認め，速効型インスリンを60U/日使用し，ようやくコントロールを得た．剖検にてCushing病と判明した．

15　内因性インスリン分泌能が保たれていたにもかかわらず慢性腎不全と多彩な大血管合併症を併発した抗GAD抗体陽性肥満1型糖尿病（SPIDDM）の症例

緒方　明貴・荻原　智子・濱　ひとみ
山口　利夫・津田　晶子・矢田　省吾
木戸病院内科

症例は46歳，女性．父方に糖尿病，母方に高血圧の家族歴有．小児期より肥満．喫煙習慣有．33